Roshiashi Kenkyukai

А. Ю. Андреев,
Русские студенты в немецких университетах XIII- первой половины XIX века.
М.: Знак, 2005. 432 с. Тираж 700 экз.

本書は、十八世紀から十九世紀前半の時期に「ドイツの大学」に留学した「ロシア人学生」の研究である。著者は、一九七二年生まれで、モスクワ大学歴史学部の十九世紀ロシア史講座の助教授であり、『モスクワ大学史』（モスクワ、二〇〇一年）などの著作をもつ新進気鋭の歴史家である。本書の内容は、序章で史料・方法論およびドイツへのロシア人留学生に関する統計情報を提示した上で、一章から五章にかけてピョートル一世からニコライ一世の治世における留学生の動向を同時代の国内・国際情勢と関連させて論じている。

本書の特色は、ドイツの各大学で刊行された学籍簿を主要史料とし、ロシアのアルヒーフおよび日記・回想記等を駆使しながら、七年戦争から啓蒙時代を経てナポレオン戦争、さらに一八四八年革命といったドイツ政治史の激動と関連させて、ロシア人留学生を媒介にしたロシアとドイツとの学問的交流の動態を実証的に解明した点である。綿密に考証された計量的データにもとづく社会史的叙述とドイツとロシアの大学づくりに邁進した学者たちに関する思想史的叙述とが見事に重なり合ったかたちで、この時代の国境を越えた「アカデミズムの空間」を描き出している。

本書の分析方法として興味深いのは、ドイツの諸大学の学籍簿での情報を解析する際に、「ロシア人学生」という範疇を精密に限定している点である。とくに重視されているのが留学生の出身地域である。著者は、ロシア帝国領内の沿バルト、リトヴァ諸県およびポーランド王国出身者を除外し、ロシア中央部およびキエフを含むウクライナ左岸地域の出身者に限定して出身地や姓を手がかりに留学生を「大ロシア人」「小ロシア人」「ドイツ系ロシア人」という三つの集団に分類している。また検討対象としての「ドイツの大学」は、神聖ローマ帝国およびドイツ連邦の境界内の諸大学に加えてロシア人留学生が多かったケーニヒスベルク、ライデン、シュトラスブルクの三大学が検討されている。他方、プラハとウィーンが除外されているのは史料的制約のためである。思想史研究の視点から見て重要なのは、法学・神学・医学を軸にした中世型の大学編成から哲学部を頂点においた近代型大学への変容のなかでゲッチンゲン大学からベルリン大学へと留学生の派遣先の中心が移り変わっていく様相である。巻末のドイツの各大学におけるロシア人学生一覧表と略伝付き人名索引は、第一級の史料である。

（下里俊行）

NII-Electronic Library Service